英雄伝説　悪魔の軌跡

シャチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説　悪魔の軌跡

【Ｎコード】

Ｎ９０２５Ｙ

【作者名】

シャチ

【あらすじ】

気づいたら死んでいた！？転生！？じゃあブロリーで！！普通の大学生がブロリーとなって空の軌跡を破壊しつくすお話です。※この小説にはご都合主義が含まれています！それをご了承の上お読み下さい。

プロローグ？（前書き）

はじめまして。シャチです。
この作品は処女作品なので
見苦しいところがあると思いますが
どうか温かい目でお読み下さい。

プロローグ？

「・・・・・・飲酒運転による事故発生率が過去最悪であり・・・」

「物騒だねぇ・・・」

彼は普通の大学生。普通の小学校、中学校、高校と進級していき、今年の春ついに大学生となった。ただやはり難関大学と呼ばれるところには進学できるわけもなく、地元の中レベルの私立大学へ進学することとなった。平々凡々、その言葉が彼にはよく似合う。

「大学に入ったところで変わったこともないなぁ・・・」

彼はただ漠然に大学に進学することだけを目標に努力してきたのでいざ進学してしまった今、目標は失われていたのである。

「・・・そろそろ時間か・・・、はぁ・・・」

ため息をつき彼は立ち上がり、玄関へと向かった。

そして扉を開け外に出た瞬間目の前にトラックが現れ、彼の意識は無くなった。

「・・・何処だここは・・・」

気がついたら彼は真っ白な空間で横になっていた。俺は玄関の扉を開けただけだぞ、と彼は不思議に思い、立ち上がって辺りを見回してみる。

「気がついたようだな。」

その声に彼は驚き後ろを振り返ってみる。そこには白いローブをまとった、地にまで届く白いひげを蓄えたいかにも威厳のありそうな老人が佇んでいた。

「誰だオッサン。」
「オッサ・・・、コホン、単刀直入に言おう。ワシは神じゃ。」

神？気でも狂ってるのか？と思うが辺りは白い空間、そして直前のトラックの記憶。まさか、と彼は思う。

「もしかして・・・、俺って死んだ？」
「その通り、よく分かったな。お前は死んでしまったのじゃ。」

即答。その言葉を聞いた瞬間彼はまた倒れそうになった。だが彼は何とか持ち直し神と名乗る老人に一つの質問をしてみる。

「俺は・・・何で死んだんだ？」
「ふむ、お前の記憶は扉を開けたところで終わっているはずじゃ。扉を開けた瞬間、酔ったアホが運転するトラックが突っ込んできてお前と衝突したわけじゃな。」

まさか自分が飲酒運転の餌食となるとは・・・。彼は落胆するが言葉は続く。

「そもそもお前は奇跡的に助かるはずだったんじゃが・・・、ワシが居眠りをしている間に弟子が確率にイタズラをしてな、君と衝突してしまったんじゃ。」

「オイオイ、そりゃ悪魔じゃないか・・・」

そんな弟子がいてたまるか。彼は怒りをあらわにする。

「ま、まぁそれは由々しき事態じゃ。もちろん弟子は処罰した。そして君が不憫すぎるのでお詫びといっては何だが・・・転生する気はないか？」

「転生？」

彼は聞きなれない言葉にキョトンとする。

「そうだ転生じゃ。君の知っている世界に君の要求する状態で転生させてあげよう。」

「ほ、本当か・・・」

「ただし要求は５つまでじゃ。さすがに１０も２０も叶えてあげる事はできない。」

彼は喜んだ。死んでしまったがそのおかげで平凡な人生から脱出できるのだ。

「じゃあ俺をブロリーにしてくれ！身長は・・・でかすぎると嫌だし１９０ぐらいまでにしてくれ。」

「ぶ、ブロリーじゃと！？悟空や悟飯ではなく？」

「ああ、俺はブロリーのほうが好きなんだ。カッコいいしな。あの力にはあこがれるだろう。」

「むぅ・・・、分かった。容姿はブロリーにしてあげよう。」

彼は嬉々と話す。が、
「能力はオプションじゃぞ。」
「なんだと・・・じゃあしょうがないな。劇中以上の能力、戦闘力をつけてくれ。」
「いいじゃろう。これで2つじゃ。・・・言い忘れたがこのままではスーパーサイヤ人にはなれんぞ。」
「まじかよ・・・」

制限の多い神様だと思うがブロリーの能力は規格外。それも仕方がないと納得?する。

「じゃあ今発表されてる。ブロリーのスーパーサイヤ人、通常のスーパーサイヤ人、伝説化、そして3になれるようにしてくれ。あと・・・できるなら4にもなれるようにしてくれ。」

一度はブロリーのスーパーサイヤ人4を見てみたい(なるのは自分だが)。そう頼んだところ、

「まぁ、いいだろう。ただしいきなりなられては向こうの世界が崩壊するかもしれん・・・。だから少し制限をかけよう。」
「崩壊って・・・、さっきから制限の多い神様だな。」
「そう言うな。そうじゃな、今言った前3つはきっかけを見つけたらなれるようにしよう。」
「きっかけ?」
「そうじゃ。ブロリーにしても悟空にしてもきっかけがあってなれるようになった。さすがに君もいきなりなれるようにすることはできない。だがそのきっかけを見つけたら通常に伝説にも3にもなれるようにしよう。4には・・・自分で努力してくれ。」

なれることは保障されたようだ。
「これで要求は何個叶えられることになるんだ？」
「そうじゃな、スーパーサイヤ人の部分はなんとかしよう。これで3つじゃ。つまりあと2つというわけじゃな。」
「あと2つか・・・。そういえば俺がなるブロリーは手加減ができるの？」

劇中のブロリーは「手加減って何だ？」と言っていた。まさかとは思うが・・・

「出来ないな。それもオプションじゃ。」
「やっぱりなぁ・・・。しょうがない日常生活や普通のコミュニケーションが出来るぐらい手加減できるようにしてくれ。あと頭脳、頭を良くしてくれ。」
「ふむ、了解した。これで5つじゃ。変更は無いな？」
「ああ。」

返事をすると神様？は後ろに振り返り、何かコソコソとし始めた。転生の準備でもしているのか？

「そういえば俺は何処の世界に転生するんだ？」
「そうじゃな・・・、空の軌跡の世界にでもどうじゃ？」

空の軌跡、彼がよく好んでプレイしたゲームである。

「は、早く転生してくれ！待ちきれない！」
「そう急かすな・・・。そうじゃ原作知識とお前の個人情報の記憶は消去しておくぞ。」
「ちょ、そりゃまんまブロｒ」

「よし、転生じゃ！」
こうして彼ことブロリーは空の軌跡の世界で転生するのであった。

プロローグ？（後書き）

さすがに難しいですね・・・
転生話だけでこんなに長くなってしまいました。
さてブロリーとなった彼はどんな行動をとるのでしょうか。
ほぼチートですが原作崩壊はあんまりしません。
あと更新はゆっくりとなると思います。
ご承知ください・・・

プロローグ？

「・・・何処だここは。」

気がついてみると彼は森の中、しかし舗装された道の上で佇んでいた。

「俺は本当に転生したのか・・・」

辺りを見回してみるが誰もいない。

「・・・試してみるか。」

そう言うと彼は腕を前に突き出し、

「フンッ。」

気弾を放出した。軽く気を入れただけであるが、目の前で爆発が起こり小さなクレーターが出来上がった。

「確かに能力をもらえたようだ。では・・・」

腕を交差し、

「ウォォォォォォオオオオオオオ！！！」

力を入れ気を高めるが、

「さすがにまだスーパーサイヤ人にはなれないか・・・」

転生する前に神に言われたとおり転生直後にはスーパーサイヤ人にはなれない。何かキッカケがなければなれないのだ。

「それよりもこの体・・・小さくないか。」

それもそのはず。彼の身長は今１３０ｃｍにも満たないのだ。彼の要求した身長とは程遠い。

「元々のブロリーの身長は２ｍを越えていたしな・・・下手に要求したから微調整がきかなかったのか？まぁいずれ成長するだろう。それにしてもここは本当に何処だ？空でも飛んでみるか。」

彼は現状を把握しようとするが、

グゥウウウ

「・・・腹が減ったな・・・ここに人はいるのか？」

まず人を探そう、そう考え彼は歩き出した。

「この度この戦争の講和条約が結ばれるエルベ離宮の警備、及び立

会いの命を女王陛下から直々に仰せつかった！！」

白髪の目立つ初老の男性が目の前の兵に檄を飛ばす。

「今現在我らがリベール王国軍とエレボニア帝国軍は休戦状態である！そのような状態の中、何か不測の事態が起こったならばまた戦争の火種となるかもしれん！」

男性は続ける。

「なので我々が直々にエルベ離宮の周辺、エルベ周歩道における魔獣の討伐を行うこととなった！」

男性の名はモルガン。王国軍のトップ、将軍の地位に就いている。

「内容は以上だ。さぁ出発だ！」

そう言い放つとモルガンは兵を従えエルベ離宮へと向かっていく。

「・・・誰もいないのか。」

彼は道に迷っていた。途中空を飛ぼうと考えたが、途中あまりの空

腹に襲われ墜落してしまった。

「このままでは死んでしまう・・・」

彼は倒れそうになるが、その瞬間、

「「「「ブォオオオオオオ！」」」」

サイのような生き物が彼に突っ込んできた。

「・・・ムン！」

それを彼はジャンプすることで避け、

「ツァアアア！」

気弾を撃ち蹴散らしていく。

「ブオ？ブォオオオオオ！」

ギリギリ気弾が当たらなかった残りの1体が再び彼へと突撃するが、

「フンッ。」

それを片手で受け止め、

「ウォラア！」

掴み上げ投げ飛ばし、絶命させる。

「・・・さすがに俺でもゲテモノは食え・・・あぁ・・・」

彼はそのまま地に倒れた。

プロローグ？

「今現時刻をもって討伐作戦を開始する！」

周歩道に到着したモルガン一行はモルガンとその側近を残し散っていく。

「・・・この講和は絶対に成功させなくてはならない。」

愛するリベールの地にこれ以上血の雨を降らしたくない。そう決心しモルガンは作戦の終了の報せを待つ。

「将軍！」

散っていた兵の１人が何かあわてた様子でモルガンにかけよる。

「どうした！」

「それが元々木々があった場所が消滅しクレーターが出来ています。」

「クレーターだと！？まさか爆弾でも仕掛けられているのか！？」

「今は分かりません！さらにクロノサイダーの群れが惨殺されています！」

クロノサイダー、彼が難なく倒した魔獣であるが危険度が高い何人も被害にあっている魔獣である。

「何が起こっているんだ・・・。分かったワシもすぐに向かう。案内しろ！」

「はい！」

モルガンは現場へと向かっていく。

「まさかここまでとは・・・」

現場に到着したモルガンは驚愕していた。あの美しい周歩道の木々が無くなり代わりにクレーターが出来上がっていたのだから。

「・・・眺めていてもしょうがない。調査を頼む。クロノサイダーの群れは？」

「こちらです・・・」

「これは・・・。」

モルガンは再び驚愕することとなった。皮膚が厚く耐久力が高いクロノサイダーの体が無残にもバラバラになっていた。

「一体誰がやったんでしょう・・・。」
「バカモン！それを調査しなければならないのだろうが！」
「申し訳ありません。」

モルガンは兵を怒鳴りつけるが内心自分も不安であった。

「ワシは一時離宮の方へ向か・・・あそこに誰か倒れているぞ！」

少し森に入ったところに少年が倒れているのを見つけると、すぐに駆け寄り抱き上げ、

「なぜ見落とす！貴様らには危機感というものが無いのか！」
「申し訳ありません！」
「言い訳は後で聞く！いまはこの少年の治療が先決だ！」

死刑宣告を受け涙目になる兵を残し、モルガンは少年を抱えたまま離宮へと向かった。

「・・・ここは・・・」

彼はベッドの上で目を覚ました。これで気を失ったのは何回目だろう。ここは何処だ？と考えふと目を横にやると、

「果物・・・」

ようやく食べ物を見つけるやいなや、彼は果物に貪りついた。一応彼も子供の姿とはいえサイヤ人、果物はものの数分で消滅した。

「気がついたようだな。」

「？？」

扉を開け、男性が部屋に入ってきた。

「そう身構えるでない。ワシはモルガンという者だ。」

「モルガン？」

「そうモルガンだ。君の名前はなにかな？」

慣れない優しい顔で質問をするモルガンとは裏腹に、彼の心の中は焦りと不安が埋め尽くしていた。

(あれ？俺って誰だっけ？俺はたしか死んで転生して・・・。その前は何だったんだ？俺はいったい・・・)

転生する際この世界の記憶と前世の記憶を消去された彼は答えることが出来ない。

「どうした?言えないのかね?」
「俺は・・・、俺は・・・・・・」

彼は頭を抱えだすが、ふとある名前が彼の頭の中に浮かび上がった。

「ブロリー・・・」
「??」
「そう俺の名前は・・・ブロリーだ。」

ブロリーとしての新たな人生が始まる。

プロローグ？（後書き）

前世の記憶が無くなり正真正銘ブロリーとなりました。
そもそもエルベ離宮にベッドってありましたっけ？
もし矛盾や設定のミスがあればご指摘してください。

ちなみもう少しプロローグは続きます。
あと感想ももらえたら嬉しいです・・・

プロローグ？（前書き）

すいません、超急展開です・・・

プロローグ?

「ではブロリー君。君は何故あの場所で倒れていたんだ？」
「・・・腹が減って気絶したんだ。」

今この部屋ではモルガンによる軽い質問が続けられていた。

「腹が減ってか・・・。戦争中だからな。食べ物が無いのも分かる。だがあんな場所に行くことはないんじゃないか？」
「いや気づいたらあの森にいた。歩いていたらあそこに辿り着いただけだ。」
「・・・詳しいことは聞かないでおこう。そうだ、君はあの魔獣について何かしっているか？」
「あの魔獣？」
「君の近くにいた、あー・・・バラバラになっていた魔獣のことだ。」
「あぁ、あれなら襲ってきたから俺がやった。」

そう答えた瞬間、モルガンは眉をひそめた。

(口がすべっちまった・・・)

ブロリーは後悔するが、

「ブロリー君、あの魔獣は大の大人でも武装しても1人では到底勝てんものだ。君のような子供がどうして勝てたんだ？」
(まずったな・・・しょうがない。)

ブロリーは腹をくくり白状することにした。

「たしかにあの魔獣を倒した記憶はあるのだが、無我夢中だったのでどうやって倒したのか分からない。」

さらにモルガンは怪訝そうな、警戒するような顔になるがそれをすぐ解き、

「そうか・・・。君がやったのか。そうとう君は強いのだな。」

「?？」

急にモルガンはブロリーを褒めるような発言をした。しかしそれと同時に

(急に褒めてきたな・・・何を考えているんだ・・・)

ブロリーも警戒することとなった。その警戒は正しく、

「そうだ君は周歩道で起きた爆発のことを知っているか？」

案の定自分がやった気弾による爆発のことを聞いてきた。無論ブロリーは

「爆発？」

何も知らない、無関係だという雰囲気で聞き返した。

「(何も知らんようだな・・・) いやなに周歩道で少し爆発が起こったらしくてな。目撃者を探しとるんだが誰もいなくてな、君も何かしっとるんじゃないかと思ったんだ。」

「俺は・・・そんなもの知らない。」

なんとかごまかせたようだ。

「そうか。それじゃしょうがないな・・・そうだ君、家族はいるのか？」
「家族？」

ブロリーは転生者、そんなブロリーに家族は・・・

「いない。」
「いない？」
「そう、みんな死んでしまった。」

半分嘘を織り交ぜながら答えた。するとモルガンの顔は曇り、
(いない・・・そうか孤児か・・・。マーシア孤児院に送るか、いやしかしもし本当に魔獣を倒したのなら・・・)
「？？」

一人物思いに入ってしまった。

「ああ、すまない。(ならば・・・)では君は行くところが無い、ということかね？」
「・・・ああ。」
「そうか・・・なら一つ提案がある。・・・ワシと一緒に住まんか？」
「アンタと一緒？」

予想外の言葉につい聞き返してしまう。

「そうだ。休戦中、といっても戦争中なのは変わらん。君が一人で暮らせないことに変わりない。」
「・・・」
「そこでだ。ここで会ったのも何かの縁だ。ワシの息子にならんか？」

ブロリーは少し考える。しかし彼はこの世界について何も知らない。故に辿り着く結論は・・・

「すぐに答えは出さんでもいいが・・・」
「いや、どうかお願いしたい。」

そう答えるとモルガンは驚いたような顔になり、

「いいのか？」
「ああ、あんたの子になれるならこれ以上の幸せは無い・・・」

モルガンは少し微笑み、

「ならばこれからはワシとブロリーは親子だ。よろしくな。」
「こちらこそよろしく頼む。」

二人は固く握手をした。

〜おまけ〜

「そういえばブロリーはいくつなのだ」

「（いくつなんだこの体は？）・・・6歳だ。」

「・・・その年では大きいほうだな。」

プロローグ？（後書き）

本当にすいません！ブロリーの親父に似合うのがモルガン将軍しか思いつかなかったのでついやってしまいました！

しかもプロローグはまだ続きます。どうかご容赦ください・・・

プロローグ？

「ワシは少し用事がある。この部屋で待っていてくれんか。」
「用事？」
「そうだ。ここ離宮で今回の戦争の講和条約が結ばれることとなっている。」

モルガンは扉へと近づきながら、
「さすがにお前を連れて行くわけにはイカンからな。スマンがここに残ってくれんか。」
「ああ。」
「そうか。しばらく待っていてくれ。」

そう言い扉の外へと出て行く。

グゥウウウウウ

「・・・また腹が減ったな。」

数時間後

「今帰ってきたぞ。」
「・・・」
「ン？・・・また気絶しておるだと・・・？」

「スマンな・・・」

「戦争中は食料が少ないというものを・・・」

ブロリーは再び果物をもらい何とか飢えをしのいだ。

「いや本当に助かった（まだ食い足りないが・・・）。」

「たく仕方が無い。行くぞ。」

「どこにだ？」

「王都に一時帰還することとなった。報告会をかねて王宮で会議を開くのでな。」

モルガンはブロリーを引きつれ外へと出て行く。

ーグランセル

「ここが・・・」

「そうだここが王都、グランセルだ。」

王都グランセル、リベール王国の中心に位置し唯一帝国の侵略を防いだ町。

「美しぃな。」
「だろう。そう言われるとこちらも嬉しくなるものだ。さぁ、こちらに来い。」

二人は城へと進んでぃく。

「これはまた・・・」
「グランセル城、我らがリベールの象徴だ。見たことが無いのか？」
「ああ、初めてだ・・・」

門の前にまで来ると

「あっ、モルガン将軍！」
「ふむ、門を開けてもらえぬか。」
「了解しました！開門！」

衛兵大声を出し指示を出すと門が開いていった。

「将軍。」
「何だ。」
「つかぬ事をお聞きしてもよいですか？」
「言ってみろ。」
「その横にいる子供はどうされたのですか？」

横にいる子、ブロリーのことだ。

「ああ、少し事情があってな。ワシが引き取ることになった。」

「将軍がですか・・・？」

「余計な詮索はするでない！」

「りょ、了解しました！」

「まったく・・・行くぞブロリー」

そう言い二人は城に入っていく。

「スマンがこの部屋で待ってくれぬか。」

「またか・・・食べ物は？」

「少しは我慢せい！まったく・・・そこにあるものは自由に食べてはよいからな。」

モルガンは半ばあきらめているようだ。

「ワシは会議に出席する。しばらくの間だ。おとなしくしていてくれ。」

再びブロリーを残し、モルガンは出て行く。

「では・・・」

もちろん食べ物を全て食い尽くすブロリーであった。

「・・・戦争の被害はあまりにも大きく、犠牲も数多いものとなりました・・・」

少し年はとっているが、美しく、それでいて優しい目を持った女性が話す。

「それらは決して返ってくるものではありません。」

「・・・」

「・・・」

周りの人物は静かに女性の言葉に聞き入る。

「だからといって憎しみばかりを持ってはいけません。そうすれば亡くなった者達が浮かばれません。」

女性は続ける。

「今我々がするべきことはリベールの再建です。必ず戦争前よりもリベールを良いものとしようではありませんか！それが亡くなった者への手向けとなります。以上で私の話は終わります。各々、自分の持ち場へとついてください。」

「「「「ハッ」」」」

女性が言い終わると周りの人々は敬礼をし解散した。話していた女性の名はアリシア・フォン・アウスレーゼ、リベール王国の女王である。

「あとモルガン将軍、あなたは少し残ってください。」

「？？了解しました。」

女王からの指名を受け、女王とモルガンは人がいなくなるまで待機することとなる。

「して何用ですか？」

「将軍、ここには二人だけ、そう固くなさらずに・・・」

「そういうわけにはいけません。立場はわきまえないといけませぬ。」

モルガンがそう言うとアリシアはため息をつき、

「あなたは本当軍人の鑑ですね。よろしいことでしょう。」

「ハッ！光栄であります。」

「ところで用件ですが・・・あなたは子供を引き取ったようですね。」

「知っておられるのですか？」

モルガンは軽く驚くが、

「フフフ、うわさで聞きました。あの将軍が子供を引き連れているところを見ると何かほほえましく思えると・・・」

「・・・」

モルガンは軍の中でも硬派で通しているので内心恥ずかしくなる。

「本当のようですね。そこで相談ですが・・・ここへ連れてきてもらえないでしょうか。」

「何故？」

モルガンはこちらの言葉のほうにより驚いた。

「それはですね・・・クローゼ、こちらへ来なさい。」

そういうと扉を開かれ女性に引きつられて少女が入ってくる。

「クローゼ・・・私の孫はこの城でずっと一人でした。戦争中だったので遊ぶことすら出来ませんし、そもそも城の中では友達なんて出来ません。」

「・・・」

モルガンはアリシアの言葉を静かに聞く。

「そこであなたが子供を引き取ったという話を聞きました。どうかその子をクローゼの友達としてあげたいのです。」

「・・・了解しました。では少々お待ちください。」

そう言いモルガンは部屋を出て行く。

数分後
「今度は何処に行くんだ？」
「女王陛下のところだ。くれぐれも無礼な発言はするなよ！」
モルガンはブロリーを引きつれ部屋へと入っていく。
「お待たせしました。」
「まぁ、その子がですか？」
アリシアはブロリーを見つめる。なるほど、気のよさそうな子だ、とアリシアは思った。
が、
「・・・」
「あらどうしたのですか。」
少女はアリシアの後ろに隠れてしまった。人見知りなのであろうか。
「このオバさんは誰だ？」
「コラッ！恐れ多くも女王陛下になんたることを言うか！」
そう言うとモルガンはブロリーの頭に拳を落とした。
「一体何するんだ！？」
「貴様が無礼なことを言うからであろうが！」
モルガンとブロリーは言い争いを始めた。だが、その様子を見て、
「クスッ・・・」

「「??」」

アリシアの後ろに隠れていた少女が少し微笑んだ。

「あの子は誰なんだ?」
「だから貴様は・・・あの方はこの女王陛下の孫娘、クローディア王女だ。」
「フフ・・・さぁクローゼ、自己紹介をしなさい。」

そう少女は言われるとブロリーの前に行き、

「・・・私、クローディア・フォン・アウスレーゼ。クローゼって呼んで。」
「俺はブロリー、そのまま呼んでくれ。」

これがブロリーとクローゼの出会いとなるのであった。

プロローグ？（後書き）

これでプロローグ、過去編は終わりです。長かった・・・自分にはまとめる力が足りないのかな・・・

そしてヒロインはクローゼに決定です。これは変更しません。誰が何と言おうと変更しません。

さてこれからブロリーはどんな活躍をするのでしょうか。・・・いや中身はぜんぜん違うからブロリーって呼んでもいいのかな・・・？

あとモルガンの姓は何でしたっけ？このまま続けられはしますが気になっています・・・

第一章？（前書き）

いきなり時間が飛んで１０年後です。気にしないでください・・・

第一章？

ーレイストン要塞

「では本日最後の訓練を行う！」

白髪の目立つ、威厳のある男が発言する。

「承知の通りこの演習には王族関係者が視察に来られている。毎年恒例のリベール軍と王室親衛隊の合同演習の目玉だ。くれぐれも無様な真似をみせるな！」

「「「「サーイエッサー！！！」」」」

男性、モルガン将軍が発言し終えると、目の前の兵士達は全員揃って敬礼し返事をする。だが、

（おいおい今年もやるのかよ・・・）

（毎年これだもんなぁ・・・最初は何を馬鹿なことをやらせるんだ！って思ったんだけど・・・）

（しかも年々でかくなっていくなんてどんな冗談だよ・・・）

全員訓練する前から打ちひしがれていた。二人を除いて。

「諸君の気持ちは分かる。だがこれは最高の訓練となるのだ。これだけは理解してくれ。」

「我々もそうだ。これぐらいでくじけていては王室を守ることなどできん！」

「「「「サーイエッサー！！！」」」」

二人の男性と女性、マクシミリアン・シードとユリア・シュバルツはそう檄を飛ばすと兵士達はやる気を取り戻す。

「・・・準備はよいか？」
「もちろん！」
「いつでも！」
「そうか・・・」

モルガンは返事を受け取ると大きく息を吸い込み、
「これより最終訓練を行う！目標は一人、ブロリーだ！始め！」
「「「「うぉおおおおおおおおおお！！！」」」」
訓練が開始するとともに、兵士達は目標の大男、ブロリーへと向かって行った。

「「「うぉおおおおおおおお！！！」」」

兵士数人が突撃してくるが、

「フンッ」

「「「うわあああああああああ！！！」」」

軽くブロリーは腕を振り抜き兵士を吹き飛ばしていく。

「「とった！！」」

後ろに回った兵士がそのまま剣を突き刺そうとするが

「「何！！」」

ブロリーは後ろを振り向かず、素手のまま剣をつかむと、

「ウォラア！」

「「うわあぁぁぁぁ」」

そのまま壁際にまで投げ飛ばした。

「貴様ら本当にやる気があるのか・・・？」

「「「「ヒィッ！！」」」」

ブロリーが目の前の兵士に睨みつけると兵士達は震え上がり、

「ではこちらからいくぞ！！」

「「「「来るなあああああああああ」」」」

一対多数の蹂躙が始まった。

「モグモグ・・・本当にあの男は強いな・・・モグモグ」
「公爵閣下、見るか食べるかどちらかになさった方が・・・」

刈上げの男性とその付き添いの老人が話す。

「まぁそう硬いことを言うな！」
「そ、そう言われても・・・」
「それよりもフィリップもよく見ろ。あんな動きを人間ができるものなのか？」
「・・・私が存じている者にあのような動きができるものはいませぬ・・・」

刈上げのほうの男性はデュナン・フォン・アウスレーゼ、次期国王候補の一人である。その横の注意をする男性はフィリップ・ルナール、悩み多き老人だ。

「本当に強い・・・」
「ええ姫殿下、私もここまで強い男とは思いもしませんでした。」

モルガンとその横の女性は真剣に訓練を観戦する。その目の前では圧倒的力でねじ伏せられていく兵士の図が繰り広げられている。

「残り二人になりましたな・・・」
「シード少佐とユリアさん、どう立ち向かうのでしょうか・・・」

「残りは二人か・・・」
「「・・・」」
シードとユリアは身構える。対して散々兵士を打ちのめしていった
ブロリーは息一つ上がっていない。
（ユリア君・・・）
（分かっています）
二人は目で会話するとそのままブロリーに向かっていった。
「「ハァアアアアア！」」
「正面から向かってくるとは・・・本当に軍人か？」
二人は剣を突き出しブロリーはそれをつかもうとする。
「今だ！」
「ハッ！」

「！？」

シードはそのまま突き刺しにかかり、ユリアはブロリーの頭上へジャンプし剣を振り下ろそうとした。

（（今度こそとった！））

だが、

「オラァ！」
「グハァッ！」
「なにっっ！？」

ブロリーはシードの剣を避けそのまま突き飛ばすとそのまま倒れこみ、

「ヌンッ！」
「カハッ！」

地を掴み、その長い足を以って逆立ちのままユリアを蹴り飛ばした。

「ここまでのようだな・・・」

モルガンはそう判断すると、

「そこまで！」

訓練終了の合図を告げた。

第一章？（後書き）

戦闘描写って難しいですね。躍動感があまりないなぁ・・・

さぁ前書きで述べた通り１０年後の世界です。これからは原作を織り交ぜながら書いていきたいです。

最後に感想をお願いします。

第一章？

訓練終了後、観戦していたクローゼがブロリーの元へと駆け寄ってきた。

「お疲れ様！」
「疲れてないがな。」

ブロリーがそう返事をするとクローゼはフフ、と笑った。

「まったくあれだけ動いて息一つあがらないとは…毎年思うが君は本当に人間なのか？」
「当たり前だ。それよりも毎年俺と闘ってまだ一回も俺に攻撃を当てた奴はいないんじゃないか？」

ブロリーがそう返すとユリアは頬を引きつらせながらはは…と苦笑いをした。

「ま、まぁそれよりも我々としては本当に軍に入ってもらいたいのだが…」
「またか…何度もいってるだろ、それは無理だ。」
「群れるのは嫌いというんだろう？」
「そうだ。」

集団行動が嫌いなだけである。

この十年でブロリーは大きく成長した。

身長192cm、体重126kgの筋骨隆々の大男。
モデルとなったブロリーより小さいのは彼が転生する際にそう要求したからである。現在一部の軍関係者によるとリベール最強の男と囁かれているらしい(カシウスを除いて)。
ちなみに転生する際の記憶の方だが現在では大分霞がかっている。
神の計らいであろうかいつまでも当時の記憶を残さないためにこっそりそうしておいたのかもしれない。

「ブロリーもそのぐらいにして…ユリアさん、シード少佐、訓練お疲れ様でした。」
「こちらこそ。」
「ブロリー君来年もよろしく頼むよ。」
「ああ。」

会話を終えるとユリアとシードはふらふらと各々の持ち場へと引き上げて行った。

「さて訓練も終わったことだ…クローゼはこれから何をするんだ?」
「あ、そのこと何だけど…」
「殿下、ブロリー、少しこちらへ。」

クローゼが言い淀むと同時に兵舎の近くからモルガンが声をかけた。

「親父、どうした?」
「それは後で話す。先に着替えて来い。」

ブロリーは頭に？マークを浮かべながら着替えに行った。

「で、何の用事だ？」

ブロリーが兵舎の一室に行くとそこにはモルガンとクローゼがいた。

「ブロリー…その格好はどうにかしてくれ…」

ブロリーが着ている服装は上が黒、下が白で帯が赤の拳法着である。王都で開かれたカルバート市で購入したものだがリベールではあまりにも奇抜なのでよく奇異の目で見られる。

「そう言うな、コレは気に入ってるんだ。それよりも何の用事なのか言ってくれ。」

「まったくお前は…まぁいい。本題に入ろう。」

モルガンは態度を改めて言った。

「この度姫殿下がジェニス王立学園へと編入されることが決まった。」

「そうなのか？」

「はい…」

どうやら事実のようである。

「そこでだ、お前も護衛として共に編入してもらいたい。」

「…は？」

ブロリーはいきなりの急展開に唖然とする。

「な、何でまたそんなことを…」

「当たり前のことだ。王立学園といっても我々の保護下より外れる。そこでだ、護衛として誰かをつけることにした。」

「そんなのは分かる。だから何で俺を…」

ブロリーは浮かび上がる疑問を口にした。

「この転入は世間には一応世間には秘匿されるものとなる。そこであからさまに護衛をつけるわけにはいけない。他の生徒の目もあるからな。」

「…」

「なので同年代のものを共に編入させることにした。だが護衛である以上それだけの能力を持ったもので無ければいけない。そこでお前が選ばれたわけだ。幸い頭もいいしな。」

モルガンはしたり顔で言い終える。だが、

「俺は嫌だぞ。」

「…何？」

ブロリーは否定の言葉を口にする。

「ジェニスは全寮制だろ。俺は四六時中誰かと一緒にいるのが嫌なんだ。」

先ほども述べたが集団行動が苦手なだけである。

「女王陛下からのお頼みだそうだ。」

「な…」

アリシアはブロリーのことをいたく気に入っているらしい。礼儀正しく（アリシアの前では）、クローゼと仲良く遊ぶさまからの評価だ。

「だ、だが俺が行くとリアンヌが悲しむぞ！」

リアンヌとはモルガンの孫娘である。モルガン宅ではブロリーはリアンヌをよくかわいがっている。

「もちろんリアンヌの了承はとっているぞ。」

「な…」

やられた、とブロリーは思う。

「そ、それでもだな…」

「…ブロリー…」

今まで口を閉じていたクローゼが言う。

「そんなに私と行くのが嫌なの…？」

「い、いやそういうわけでは…」

クローゼがブロリーの顔を見て言う。ブロリーは長身なので必然的にクローゼは見上げるように、上目遣いとなる。この状態のクローゼにブロリーは何度も負けてきた。

「わ、分かった分かった。…俺も一緒に編入するよ。」

ついにブロリーは根負けした。

「本当!?ありがとうブロリー!」

「…はぁ。」

喜ぶクローゼとは対照的に、ブロリーはため息をついた。

「ちなみにお前の荷物は既にまとめている。」

「やりやがったな…」

ージェニス王立学園

現在ブロリーとクローゼは教室の前に立っている。編入する際にブロリーも試験を受けたが結果は好成績、学園の職員室では成績優秀者が二人も来ると話題になっていた。

「はぁ…」
「もうブロリーったら…いい加減にやる気を出してよ。」
「いや、だってなぁ…」

小声で話していると教師の中から一際大きな声が聞こえてくる。

「では編入生に入ってきてもらいましょう。では入ってきて下さい！」

扉が開かれると先にクローゼが教室に入っていった。

「1年に編入となったクローゼ・リンツです。この素晴らしい学園生活を長い間たのしみにしておりました。今日、みなさんの一員となれてとても光栄に思います。」

クローゼは堅苦しく自己紹介をしていく。

「私は飛んだ未熟者で、皆さんにご迷惑をおかけしてしまうかもしれませんが……精一杯頑張りますので。どうか、よろしくお願いします。」

自己紹介をし終えると教室中から拍手をされる。

(うーん、突然の編入せいか…。)

メガネの女子生徒は隣の刈上げの男子生徒に小声で話しかける。

(良いところの子かな？ちょっと堅い感じもするけど……)

良いところどころか王族である。

（1年の5月に編入ねぇ。ちょっとワケありっぽいよな。）

話している内に先生が再度口を開く。

「実は、もう一人編入生がいます！」

そう言うと教室内は騒然となった。

（まじかよ！絶対ワケありだって！）
（ちょっと落ち着いて！話は一回見てからよ！）

「では入ってきて下さい！」

その声と共に一人の男子生徒が教室に入ってきた。だがそれと同時に教室が静かになっってしまった。

それもそのはず、顔立ちは良いが超長身、制服の上からも分かるほど筋肉が膨れ上がっている大男が入ってきたのだから。

「「「「………」」」」

「ハハハ…では自己紹介をしてください。」

「…はい…」

男は口を開く。

「ブロリー…です。」

ブロリーとクローゼの学園生活が始まった。

第一章？（後書き）

ブロリーがジェニスへ編入してしまいました。
さて、どんな問題が起こるのでしょうか！？

ちなみにモルガンと話していたときの服装は下はブロリーの、上はフュージョン後の服と思って下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9025y/

英雄伝説　悪魔の軌跡

2011年11月30日18時53分発行